

NEWS letter vol.09



Graduate
Program for
Embodying
Informatics

4大学合同WS (2018年4月6日・7日 筑波大学にて開催)

複合領域(情報)リーディングの今後の連携強化、学生交流を目的として、豊橋技術科学大学、名古屋大学、筑波大学、早稲田大学の4リーディングの学生・教職員が集まり、お互いのリーディングの紹介や、グループディスカッション、情報交換会が筑波大学にて行われました。筑波大学が誇るエンパワースタジオには世界最大のVRシステム「Large Space」が存在し、迫力満点のVR映像を体験させていただきました。その後、各大学混成のチームに分かれて「20年後の未来に私達が実現化するであろう、未来のライフスタイル、デバイス、サービス、システムを提案し、劇形式で発表せよ」というテーマに基づいて議論し成果の発表・審査が行われました。2日間に渡って開催されたため、夜遅くまでディスカッションや研究生活の話に花を咲かせ、深い交流を行うことができました。来年以降も参加して、積極的な交流を通してイノベーティブなものを生み出していけたらと思います。

(L2 澤 弘樹 記)



筑波サマースクール (2018年10月20日・21日 早稲田大学にて開催)

今回のサマースクールは研究を見直すようなテーマで、3つのチームに分かれて議論・発表しました。1日目は早稲田プロデュースで、「Presentation Exchange」を行いました。Presentation Exchangeとは他者の研究を代わって発表するもので、相手の研究を十分に理解していないと適切に紹介できません。ましてや質疑応答は困難を極めます。この経験は、今後論文調査をする際にどこに着眼すべきかのヒントになるかと思います。また、自分の研究を人に発表してもらうことで、どこが伝わりにくいのかや、どうしたらわかりやすく伝わるのか客観的に評価でき、見えてくる課題もありました。2日目は筑波プロデュースで、「Research Questionとは何か」について議論・発表しました。研究と開発の違いや、研究の意味など各自の軸を議論し合い、研究への姿勢を見つめ直す良い機会となりました。分野によって視点が違ったのが面白かったです。スキルアップという意味でも交流という意味でも成長できた2日間になりました。

(L1 斎藤 菜美子 記)



第65回理工展

2018年11月3、4日に開催された第65回理工展に、実体情報学博士プログラムの企画展示を出展しました。来場者は普段目につくことのない3Dプリンターを使った工作や、ロボットなどの研究成果を興味深そうに眺めていました。とくに子どもたちの楽しそうな声が上がっていたのは、ゲームの改造をとおしてプログラミングを学ぶツールの展示です。保護者からも小学校での必修化が始まるプログラミング教育に関連した相談を多く受けました。近年、理工学系の学びが大事だと呼ばれる一方で、具体的な知見や学び方については、大学と市民との間には依然情報のギャップがあります。今回の展示のような科学コミュニケーションの場づくりに、来年度以降も継続して取り組んでいきたいです。

(L5 鈴木 遼 記)

展示物

- 実体情報学プログラム紹介ポスター
- 所属学生の研究論文、著書の紹介コーナー
- SiV3D for Kids : ゲームの改造をとおしてプログラミングを体験するツール
- よるの遊園地 : 100 分の1スケールの動く遊園地の模型
- 絵文字づくり : パーツを組み合わせて新しい絵文字を発明する体験型展示
- 声を聴いて人とインタラクションするロボット
- 三次元軌跡を生成するカム機構



第3回共同研究報告会より

HP Project Mars -Education League JP—参加における成果と貢献

概要説明 :

本大会はHPの主催する学生コンペティションであり、火星における人類100万人の暮らしを設計するため、全国の高校生から大学院生まで104チーム410名が参加しました。

L4・L2チーム :

L4加藤陽、加藤卓哉、金井太郎、津村遼介、
L2福原吉博で構成されるEmbodiment Terraformarsは「集団規模に応じた予防医療を実現するインフラ」を提案し、“最も火星における生活をイメージできていた”と評価されJAXA特別賞を受賞しました。大会後半では運営側として、これまでのLDG活動からInputしたチームコンサルティングやファシリテーションの技法を、ワークショップの企画運営や国際コンペ選出のための戦略提案、情報発信という形でOutputすることができました。

(L5 加藤 陽 記)

L1チーム :

L1の加瀬敬唯、出井勇人、澤弘樹、三宅章太、及び外部学生のM1甲斐大貴で構成されるMIKKSは大学院生である利点とメンバーの多様性を活かし、火星都市の構造計算を行い、エネルギー問題を解決し、そして火星の厳しい環境を耐えうる「太陽が見える火星都市」を提案しました。これまでのLDG活動で培ったチームをまとめ上げる能力や経営戦略をベースとしてプレゼンを構成した結果、“技術的に地に足のついたコンセプト”と評価され、最優秀賞を受賞しました。

(L2 加瀬 敬唯 記)

※本文中の学年は、コンペ
参加当時の学年で記載



優勝賞品として行ったカナダ出張
(※出井さんは体調不良で欠席)

海外インターンシップ体験

カーネギーメロン大学(アメリカ) L4 斎藤 翔

私の専門分野であるクラウドソーシングと Human-Computer Interaction の最先端であるカーネギーメロン大学で留学を行えたことは、私の大きな強みと自信に繋がりました。L3に上がって間もなく訪問先の教授の Jeffrey Bigham 先生と連絡を取り始め、同年9月から半年間のインターンを開始しました。所属したグループの研究室は非常に開放的で、毎年のようにトップ国際会議へ論文を通じて優秀な学生がたくさん集まり、日々議論を行っていました。会話の内容やスピードにはいつも圧倒されっぱなしでしたが、研究室のメンバーの一人とタッグを組み、最終的に学部生も巻き込んだプロジェクトのリーダー的立場として成果を上げることができました。また、研究の合間には仲間と食事やジムに出かけ、プライベートの時間をともに過ごすことで、帰国後もいつでも議論をし合えるような親密な関係を築くことが出来ました。素晴らしい機会を与えていただいた本プログラムに感謝するとともに、今回の経験を今後の研究活動にしっかりと生かしていきたいと思います。



カーネギーメロン大学の研究室の仲間と。
(一番右)

新入生・体験生紹介

新入生(L1進入)斎藤 菜美子

研究分野：ロボットマニピュレーション、
ディープラーニング

Namiko Saito

人とロボットが共存できる社会を目指して研究したいと思い、博士課程進学を決めました。これを実現するには、情報系機械系の内容は無論、人間生活に関わる多様な知見が求められます。リーディングでの機会を生かし、分野にとらわれず少しでも興味を持ったことには積極的に挑戦して培っていきたいと考えています。



新入生(L3編入)ファリド・アハメド

研究分野：移動ロボット工学、
コンピュータビジョン

Farid Ahmed

I'm taking part in the leading program as a doctoral student from Waseda IPS (Kitakyushu campus). The program is a great opportunity for me personally to connect with researchers and learn of their experiences through colloquiums, joint workshops, and course lectures. I believe the program puts me in an important position to make a knowledge bridge between the communities in Tokyo and Kitakyushu.



体験生 山本 晋太郎

研究分野：コンピュータビジョン、
自然言語処理

Shintaro Yamamoto

1年半通常の修士課程で過ごしましたが、体験生として参加するリーディング大学院での活動はこれまで経験したことのないことが多く非常に充実しています。これから、研究室内では得ることのできないものの見方を他の学生から得ていきたいと思っています。



体験生について：

本プログラムへの編入を検討している学生を対象に、2018年度秋学期より半年間、プログラムの授業やイベント等を体験することができる「体験生」の募集を開始しました。昨年秋には面接審査の結果、1名の学生が「体験生」となり、工房での仲間との生活をスタートしています。

早稲田大学 西早稲田キャンパス／工房へのアクセス

- 地下鉄東京メトロ副都心線 西早稲田駅出口3(早大理工方面口)がキャンパスに直結
- JR山手線 新大久保駅から徒歩12分
- JR山手線・地下鉄東京メトロ東西線・西武新宿線 高田馬場駅から徒歩15分



実体情報学博士プログラム

News Letter vol.09

2019年2月27日発行

企画・編集 早稲田大学実体情報学博士プログラム

<http://www.leading-sn.waseda.ac.jp/>

実体情報学博士プログラム事務局

〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1
早稲田大学西早稲田キャンパス51号館1階理工統合事務所内
Tel 03-5286-2836 Fax 03-5286-2847
leading-sn-info@list.waseda.jp

実体情報学博士プログラム「工房」

〒169-0072 東京都新宿区大久保2-4-12
新宿ラムダックスビル3F
Tel 03-6233-7801 Fax 03-5285-0028

Comments from graduates

修了生紹介

今春も10名のリーディング生が巣立っていきました。
プログラムの思い出と今後の抱負を語つもらいました。

「やりたい放題」を実現できる環境

岡村 尚美 *Naomi OKAMURA*

結局自分が何をリードできるようになったのか制限字数内で述べるのは難しいが、良い意味で“好き勝手な挑戦”と“アカデミックな遊び”に費やした5年間だった。研究室間の交流を活性化するために、必修科目を休講にしてまで開催した野球大会は、今や恒例行事となった。海外留学は3度、海外出張は10度におよび、工房での共同研究についてはメンバー全員の渡航費を負担してもらえるよう交渉もした。個人研究費も期限ギリギリまで事務局に交渉して、本当に必要な用途で使うことができた。学位論文の内容に関わらず、学内外との共同研究もやりたいだけやって、専門分野外の先輩研究者や企業の人とも友達のように仲良くなった。

学位を取ること以上に、世界中でこれから的人生戦略のヒントとなる経験を積み人脈を築けたことが財産だと思う。一方で、ホームである工房で博士課程の同期と深夜までお酒を飲みながら語っている時間が一番楽しかったとも思う。これから各々新しいフィールドに散つていった先、社会にどんな影響を与えていくのかとっても楽しみだ。



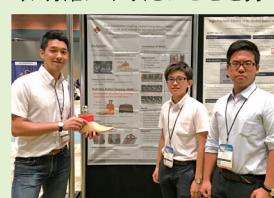
最後の学会出張先のモルディブにて

周りを巻き込んで”挑戦”した5年間

加藤 陽 *Akira KATO*

プログラムに所属した5年間、やりたいと思ったことをなんでもやらせてもらった。博士課程にも、海外渡航にも興味を持っていた学部時代に、ここまでピッタリのプログラムのしかも1期生として採用されたおかげで素晴らしい経験をすることができた。新しいプログラムを手探りながら形作る経験、その忙しさに翻弄された数多くの講義、やってみたいと思ったときに一緒に頭を悩ませるWILLメンバー、学生の様々なわがままを聞いてくれる先生・事務局の方々、自らの経験だけでなく、多くの人に支えられ出会うことができたことが本プログラムから得た一番の財産だと思う。

それまでは周りに合わせて行動するが多く、明確にやりたいことを持つわけでもなかつた自分が、本プログラムに進む決断をし、異分野や海外の人とやり取りをする中で価値観が広がり、何事においても”挑戦する”意識を持つようになったように感じる。卒業後は、企業の新しい部署の「工房」に似た場所で新たな立ち上げを担う予定である。立ち止まったときには初心を思い出し、5年間で培った力を存分に発揮したい。



留学先の学生と出会った学会にて、共同研究の内容を発表する加藤さん(左端)

リーダーとして社会に貢献していきたい

古志 知也 *Tomoya KOSHI*

無事にこのプログラムを修了することができ、非常にうれしく思います。これまでお世話になりましたプログラム関係者の皆様に、深くお礼申し上げます。リーディングプログラムは、産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーを育成するためのプログラムですが、そもそもリーダーとは何でしょうか。このプログラムに進入した当初はあまりピンときていませんでしたが、現在では、「自分の価値観に基づく未来像を持ち、その未来像の価値を皆に納得させ、その未来像の実現に向けて皆で協力することができる人物」がリーダーであると考えています。自分の価値観を持つためには「様々な分野での経験」が、皆を納得させるためには「物事をわかりやすく伝える能力」が、皆で協力するためには「相手の考えを理解する能力」がそれぞれ必要となります。このプログラムはこれらの経験や能力を得るために多くのチャンスを与えてくれました。

今後は公的研究機関に研究者として勤務します。ただの研究者ではなく、自分が考えるリーダーとして社会に貢献できるよう、努力を続けていきたいと思います。



L1生の時の理工展にて
(左から2人目)

融合体験を通して感じた、難しさと達成感

金井 太郎 *Taro KANAI*

『工房』での活動や専門外の情報分野の勉強、2度の海外留学など、本プログラムで経験できた事は数知れないが、中でも特に印象に残る、山スクール関連の活動について述べたい。有志で実施された山スクールは、実際の林業現場で伐採体験等を通して、現場ニーズに沿った研究を行うという活動であった。情報系学生との初めての本格的な共同研究であったため、当初は用語の使い方や進め方の感覚の違いなどから噛み合わないこともあった。議論を通して、徐々に理解し合いながら、最終的に職人の勘に頼っていた部分を定量的に評価すべく林業計測システムを構築した。さらに、一連のプロセスを他の学生にも共有したいと思い、新しい授業の形として Waseda Vision 150 Student Competition やリーディングフォーラムにおいて提案も行った。これらの活動を通して、異分野との交流の難しさと、それを乗り越えて完成したときの達成感を味わうことができた。本プログラムに参加していなかつたら、決して体験し得なかったことであり感謝している。



『一期生』としての5年間を振り返って思うこと

加藤 卓哉 *Takuya KATO*

このプログラムでの様々な経験や苦悩は、私に『考えるのは何か』、『価値とは何か』といった様々な問いに答えを出してくれるきっかけになったように思います。プログラムに入った当初は、研究室では学ぶことができない他分野の知識や考え方、価値観に日々興奮していましたことを覚えています。一方、こうした新たな刺激が今までの自分を大きく変え、逆に苦悩に繋がることもありました。講義や議論で考えたことや知識を何とか実践して形にしようと、一期生の同期と共に様々な活動に取り組んできました。林業支援技術、リーディングプログラムを支援するプラットフォーム、火星インフラデザイン。『自分たちの成長を証明したかった』という思いとは裏腹に、どの活動でも強く印象に残っているのは、得られた成果ではなく、失敗と自分たちの未熟さです。しかし、こうした機会を経て感じたこと、得たもの、考えたこと、それら全てが今の私を構築する非常に重要な経験になっていると感じます。そして、こうした経験を共にできた仲間に出会えたことを心から幸せに感じます。



望みを将来に置く

佐々木 崇史 *Takafumi SASAKI*

早稲田に来てから9年が経ちました。思い返してみると、入学時では想像のできなかつた経験が、頭の中を巡っています。特に実体情報学博士プログラムに在籍したこの5年間は、「入ってよかった」と一言で表せられないほど、良い経験もあれば苦しい期間もありました。なれない情報科目では課題がなかなか終わらず、ベトナム研修中に少ない時間を見つけては話し合いました。いただいた機会を大事に、少しでも多くの情報を獲得しようと、英語でも貪欲に質問するようになりました。これまで上手くできていたと思っていたプレゼンは、このプログラムでは並、いやそれ以下で、何度も構成や発表の仕方を練り直しました。このような機会、そして苦楽を共にした仲間は、まさに「何ものにも代え難い」ものであったと感じています。貴重な機会をくださったすべての方に感謝申し上げます。ありがとうございました。最後に、後輩たちへ。卒業まで、悔いを残さぬよう、全力で頑張ってください。応援しています。



デザインスクールにて(前列一番右)

How Leading Program Changed My Life リーディングプログラムが変えた私の人生

トモ テイト・プラドノ *Tito Pradhano TOMO*

As I am aiming to become one of the next industrial leaders in the future, important skills such as being able to present my ideas and communicate them to people with various backgrounds, leadership, and proficient management abilities are required. However, gaining these skills can be difficult if the surrounding environments do not support us. Unlike a regular doctoral course, the leading program provides many opportunities that can encourage students to gain valuable experiences and develop these skills through its mandatory activities. For example, the professional English training program makes me became more confident in my presentation skills. I passed the final screening (short presentation) for a research grant from the Japan Society for the Promotion of Science (JSPS) thanks to this training program. Additionally, one of the research results achieved through the internship in IIT was demonstrated at the ICRA 2017, where our team won a second place award in the soft component technologies challenge. Indeed, this program is not only improving the quality of my research, but also offering many opportunities for improving skills and gaining experiences that are valuable for becoming a next industrial leader.



Looking back at the Leading Program

南 重松 行紀 *Yukitoshi MINAMI SHIGUEMATSU*

Having participated in the Leading Program for Embodiment Informatics was a very endowing and fruitful experience. At first, all the extra classes and colloquiums, as well as the extra activities required to finish the program seemed overwhelming. However, they all started to fit perfectly into the designed curriculum. Through the program, I was able to acquire all the abilities and knowledge to become a leader on my field of expertise, while at the same time having a good understanding about other areas, giving me a wider perspective and creativity to analyze and solve problems. This was magnified by having the chance to carry out collaboration researches with other members of the program. Also, the opportunity to travel abroad for an internship was an invaluable experience, where it was possible to gain insight and foresight about what the state of art is, both in Japan and in the world. I would really like to thank everyone who made it possible for me to successfully finish this program, and I am sure that all I learned and acquired during it will definitely guide me to future breakthroughs in my life.



想像できない人生を歩む方が楽しい

津村 遼介 *Ryosuke TSUMURA*

5年前の自分が今自分を想像できたかというと、無理だと思います。そのくらい実体情報学博士プログラムで過ごしたこの5年間で、自分はたくさんの貴重な経験をさせて頂きました。プログラムに入る前は卒業したら日本企業に勤めようと思っていたが、様々な経験や出会いを経て、気づけばアメリカの大学で医療ロボットの研究を続けることになっていました。やっと自分がやりたいことが何なのかほんやりと見えてきた気がします。そしてそれはこのプログラムを通じてお世話になった全ての人達のおかげです。本当にあって良かったなと感じております。そして人生の節目に立った今、プログラムに入った時と同じく、これからどんな人生を歩むことになるのか全く想像できないです。でも想像できない人生を歩む方が楽しいのだと、このプログラムを通じて学びました。次の人生の節目に立った時、今と同じことを思えるようこれからも邁進します。本当にお世話になりました。



「言葉の意味」について実践的に考えた3年間

山田 竜郎 *Tatsuro YAMADA*

実体情報学プログラムには博士後期課程(L3)からの編入という形で参加した。学部時代の研究室でひたすら本を読んでいた頃に、「言葉の意味とは何なのか?」という問い合わせの奥深さに魅せられ、これをロボットを使って理解しようと修士課程から現在の研究室(尾形研)に進んだ。修士2年間ではこの問い合わせに片足を踏み入れるかどうかで終わってしまうと博士後期課程への進学を考えた時、経済的支援を受けつつ研究を続けられる本プログラムの受験を決意した。

プログラムに参加する他の研究室の学生や留学先のプリマス大学の学生との議論からは、自分の研究室の中だけでは得られないアイデアや視点に気づくことができ、同時に「言葉の意味」という問題の難しさを何度も痛感させられた。この気づきというのは議論の内容自体からだけではなく、「分野や使用言語を異なる人たちとの議論」という形式からも与えられる、二重のものであり、コミュニケーションというより大きな枠を考えることの意義を強く感じた。実体情報学での経験を元手に、これからも物事を深くかつ広く考え、社会に貢献できる人間になりたいと思う。



NIPS2016でのロボットデモンストレーション発表

修了生へ贈る言葉

2013年に実体情報学プログラムが採択され、選抜試験の結果、L3・L2編入を含め19人が合格し、2014年4月に第1期のコース生となりました。そして2019年3月は5年一貫教育を受けた最初のコース生が修了するときです。実体情報学の構想を練り始めた2010年12月から8年が過ぎました。準備、運営、ワークショップなど、多くの想い出がありますが、時が経つのは速いものです。2019年1月には、その1期生とL3編入生合わせて10名のQE3が実施されました。これまで学生諸君と一緒に創ってきたリーディングの一つの区切りと言えるでしょう。修了生諸君には、実体情報学を社会に向けて大いに発信してくれることを期待し、現役の諸君には、実体情報学をさらに飛躍させてほしいと願っています。



Shigeki Sugano

海外インターンシップ体験

ノーザンブリア大学(イギリス) L4 野澤 直樹

海外でのインターンシップでは単に技術的な知識を得られるだけでなく、研究を進める上での戦略的なアプローチを学べるといった側面も持ります。特に、私が行っているDeep Learningを応用した技術は発展が著しく、新規性を見出すために他の研究とは異なったアプローチが必要となります。本滞在ではDeep Learningをいかに他分野へ応用するかという課題のもと、研究アイディアから論文執筆までの中長期的戦略の構築や、戦略遂行時における密なディスカッションでの軌道修正などを学びました。この経験は研究だけでなく、今後のキャリアにおいて大いに有意義であると確信しています。また、日本人がないという環境は、研究や生活における異なる価値観に触れることができます。共同プロジェクトにおいての作業分担や進捗の管理などには日本人とは異なる接し方が求められ、グローバル社会でどのように振る舞うべきかを考えさせられる、非常に大きな経験となりました。



ジョンズ・ホプキンズ大学(アメリカ) L4 ヤルタ・ソプリン ネルソン・エンリケ

From April to September 2018, I was an intern at the Center for Language and Speech Processing (CLSP) in Johns Hopkins University (JHU) at Baltimore, U.S.A. During my stay, I had the opportunity to learn about speech recognition systems under the tuition of Prof. Shinji Watanabe. In my stay, my mailbox received notifications of various presentations and seminars. Most of them are conducted by professors and researchers from all over the world and specially



Johns Hopkins University

companies from U.S.A. The members of center are also composed of peoples from different countries. This strong global collaboration brings the chances to broaden my view. I also had the opportunity to participate in the 2018 annual Jelinek Memorial workshop on speech and language technology, where I was able to observe the strong global collaborations with both industry and academia. Finally, I would like to express my appreciation to the Graduate Program for Embodiment Informatics for giving me this opportunity.

聖アンナ高等研究所(イタリア) L4 三宅 太文

5月末から11月中旬までの約半年間、イタリアの聖アンナ高等研究所の Silvestro Micera 教授の研究室へ参加しました。自分の歩行訓練ロボットの研究に活かすため、ロボット工学の中でもバイオメカニクスや神経生理学に基づく研究に特化している研究室を選びました。つまずきを発生させる装置を開発した上で、14名の被験者で歩行実験を行い、つまずき経験後の人たま先制御に関する制御則を明らかにしました。日本では主に一人で実験系の組立等を行っていたため、エンジニアリングな部分は大分貢献できました。研究室は、博士学生1名とポスドク2名、インターン生である修士生や学士生から構成されていました。男女比率が半々であること、インターン生として他国から常に学生が来ていること、研究室の垣根がないところ、この3つが特に感じた日本との違いです。イタリアは歴史長く豊かな文化を持っているため、日常生活も非常に充実していました。振り返ってみると、日常生活の何気ない会話やトラブルこそが真に自分を成長させてくれた要素だったなと思います。



FX Palo Alto Laboratory(アメリカ) L4 佐藤 隆哉

2018年6月から半年間、アメリカのシリコンバレーにあるFX Palo Alto Laboratory(FXPAL)にてインターンを行いました。そこでは、世界トップクラスの研究者と共に研究を行うことができ、とても刺激的な経験ができました。私の研究では、FXPALの研究テーマのうち、今いる場所と遠隔地とのコミュニケーションを円滑にする技術に関して研究を行いました。FXPALでは、ワークライフバランスがとてもよく、



多くの社員の方が9~10時頃に出社し、16~17時頃に帰宅をする生活を行っていました。しかし、FXPALの方はとても作業効率がよく、やるべきことはしっかりと期限内に終わらせており、シリコンバレーの技術者・研究者のレベルの高さを実感しました。このような、世界のトップレベルの研究所で世界のトップレベルの方と一緒に働く経験ができたことは、自分にとって非常に有意義でした。今後も、FXPALでの経験をもとに日本でも研究生活に励んでいきたいと思います。

FXPALとコラボレーションしているToy StoreのオーナーとFXPALで自分が所属していた研究グループの人たちが、自身の作成したロボット操作インターフェースでロボットを操作している様子。

スイス工科大学ローザンヌ校(スイス) L4 程 正雪

2018年10月から4ヶ月間、スイスのフランス語圏にあるスイス工科大学ローザンヌ校(以下 EPFL)でインターンシップを行いました。EPFLは、2018年のQS世界大学ランキングで12位を冠し、国際的に高い評価を得ています訪問先の教授であるTouradj Ebrahimi教授は、マルチメディア信号処理グループ(MMSPG)を率いている、JPEG標準化委員会の招集者であり、私もそこで画像圧縮と画像品質評価に取り組んでいました。研究室にはイタリア、トルコ、ギリシャ、ロシア、シンガポールから学生が集まり、刺激的な環境の中でいつでも英語でお互いの研究を議論することができます。毎日研究室に行き、教授と隔週の報告をしています。さらに、EPFLでは興味深い研究活動が数多くあり、Facebook AIリサーチディレクターのLeCun氏の講演やGoogle TensorFlowのロードショーにも参加しました。今回のインターンシップから、良い研究成果が得られると思っています。

地元の学生との深い交流をもたらし、アジアとは異なる文化、生活、研究についても学びました。このような素晴らしい経験は自分にとって非常に貴重な機会となりました。このような機会を提供して頂いた本プログラムに感謝しております。



スイス工科大学ローザンヌ校のMMSPG研究室の仲間と。(左から3番目)